

〔石けんと合成洗剤の違い〕

あなたはどこまで知っていますか？

洗うとなぜ汚れが落ちるのか

水溶性の汚れは、水で洗うだけでほとんど落ちます。
水と汚れがなじみ、洗い流すことができるからです。

考えてみると、この「水」というのは不思議ですね。
飲めば身体の中をきれいにしてくれるし、洗えば汚れを落としてくれます。
私たちは水なしでは生きていけません。

さて、油性の汚れは水とはなじまないのです、水だけではきれいには落ちません。
そこで、洗剤や石けんを使うこととなります。

洗剤や石けんに含まれている「界面活性成分」が、水と油とをなじませる働きをして、
汚れを引き離すのです。

石けんと洗剤の違い

環境保護意識の高まりの中、合成洗剤がよくないことは知っていても、ほとんどの人々が
この違いをよくわかっていないと思われます。
固形のものだけが石けんだと思ったり、植物原料のものがいいと思ったり・・・

実は石けんと洗剤の違いは作り方なのです。
お味噌やお酒のように自然の力を借りてじっくりとねかせて作られるのが「石けん」工場
で化学変化によって人工的に作られているのが「合成洗剤」なのです。

界面活性剤

話を戻しましょう。水と油のように本来そのままでは混じりあわない物質を、混ぜ合わせる
働きをするものを「界面活性剤」と呼んでいます。

界面活性剤にはさまざまなものがありますが、その中で脂肪酸ナトリウムと脂肪酸カリウム
の二つが「石けん」で、他のものはすべて「合成洗剤」です。
これはとても簡単なことなのですが、いまだに多くの人たちが石けんと合成洗剤のちがいを
誤解しています。

昔ながらの石けんを使っていた当時の言葉の名残で、粉末洗剤のことを「粉石けん」と呼び
固形の洗剤のことをすべて「石けん」と呼んでいますね。

実際にはこれは大きな間違いなのです。

なお、ふつう皆さんが洗剤だとは思っていないシャンプーやリンス・歯磨き剤・柔軟剤なども、
合成界面活性剤を使っていれば、みんな合成洗剤の仲間なのですよ。

石けんの起源

石けんはどうやって生まれたのでしょうか？

言い伝えによれば、今から約 5000 年ほど昔のこと、神への供え物として焼かれた羊から
したたり落ちた油が、木の灰(アルカリ成分)と混じり、土にしみこんだものが石けんになった、
とされています。

その場所が「サポールの丘」と呼ばれていたことから「汚れをよく落とす不思議な土」として
広まり、この地名がソープの語源になったということです。

合成洗剤の歴史

では、合成洗剤はいつ頃から使われるようになったのでしょうか？

合成洗剤（本当は合成界面活性剤と言ったほうがいいかもしれませんが）は第一次大戦中にドイツで開発されました。

大量生産をはじめたのはアメリカで、第二次大戦のころです。

石油から作られた合成洗剤は、あっという間に世界中に広がりました。よく汚れが落ちるし、安価で大量に生産でき、経済優先の時代にはぴったりだったのですね。日本で、合成洗剤の消費量が石けんの消費量を上回ったのは、昭和38年のことです。そんなに遠い昔のことではありません。

合成洗剤の害について

初期の合成界面活性剤（合成洗剤）は非常に悪質で、さまざまな公害を引き起こしました。

A B S（アルキルベンゼンスルホン酸ナトリウム）

- ・ 初期の主流製品。日本では誤飲による死者も出ています。

L A S（直鎖アルキルベンゼンスルホン酸ナトリウム）

- ・ 毒性はA B Sより少ないとされたが、30年を経てもその毒性が残留するとも言われています。今もなお世界で売られているようです。

2000年のP R T R法でL A Sをはじめとする6つの界面活性剤が指定されました。

合成洗剤もいろいろ研究され、しだいに毒性の弱いものに主流は移っています。しかし、あくまでも「弱く」なっただけで根本的な解決には至っていません。

添加剤について

さらに、合成洗剤にはさまざまな添加剤が使われています。

（一部の石けんにも使われています）

石けんカスを防ぐためのエデト酸塩をはじめとしてさまざまな防腐剤・酸化防止剤、さらには本来不要な着色剤や香料など。

添加剤のなかには、アレルギーをおこしたり、発ガン性を指摘されているものもあります。

名前やC Mにまどわされず、成分表示をよく見て購入するよう心がけましょう。